

## 高校生における非認知能力が地域環境とシビックプライドに与える影響

正会員 ○ 森 豪大\*  
 会員外 今井 理貴\*\*  
 正会員 藪谷 祐介\*\*\*

Big Five 尺度 パーソナリティ 地域参画  
 公園 地域教育 地域愛着

## 1. 研究の背景と目的

非認知能力は、知能や学力として測定されるもの以外であり、何らかの形で測定可能であり、社会の中で望ましいとされる何らかの結果を予測し、教育、介入、投資によって変容可能である、心理的な特徴のことを指す<sup>1)</sup>。2022年に改正された高等学校の学習指導要領では、学びに向かう力・人間力の育成が掲げられており、これは学力以外の力、つまり非認知能力の育成を目指していることを意味している<sup>2)</sup>。さらに、非認知能力は、地域の市民活動への参加や他者との協働する力と深い関係があるとされており<sup>3)</sup>、地域環境との接触行動とも関係があると考えられる。なお、地域環境は、公園や自然、祭り、公共交通機関、人との関わりなどを指す。

近年、高校生において将来の定住意識を高めるために、シビックプライドの向上が重要視されている。シビックプライドは、都市に対する市民の誇りと定義され、自分自身が地域を良くしていこうという当事者意識に基づく自負心という意味を含んでいる<sup>4)</sup>。森ら<sup>5)</sup>は、高校生においてシビックプライドと将来の定住意識に関係があることを指摘していることから、いかに高校生におけるシビックプライドを高めるかが人口減少社会において地方都市が生き残るために重要であると考えられる。米原ら<sup>6)</sup>は、非認知能力の中の開放性と協調性がシビックプライドの一側面である地域愛着を高めるとしており、非認知能力とシビックプライドに関係があることを示しているが、具体的にどのような非認知能力が地域での活動の心理的要因となり、シビックプライドを高めるのかという点は明らかにしていない。

したがって、本研究では、高校生において非認知能力が地域環境とシビックプライドに与える影響を明らかにすることを目的とする。高校生における非認知能力の育成が着目されている中で地域環境との関係性も含めた調査研究を行うことでシビックプライドを高めるための知見となることに社会的意義を有する。

## 1-2. 研究方法

まず、3大都市圏の居住者を除く高校生を対象に、WEBアンケート調査を実施した。この結果を用いて非認知能力の単純集計を行い回答の傾向を把握し、因子分析を行い、シビックプライドと地域環境の構成要素を明らかに

する(3章)。その後、共分散構造分析を用いて、非認知能力と地域環境、シビックプライドの関係を明らかにする(4章)。これらの結果を用いて、考察を行い(5章)、本研究で得られた知見と今後の展望をまとめる(6章)。

## 2. 非認知能力とシビックプライド調査

## 2-1. 調査方法

3大都市圏の居住者を除く高校生を対象にWEBアンケート調査を実施した(表1)。さらに、調査項目を表2に示した。調査項目は、①属性、②非認知能力、③シビックプライド、④地域環境との接触度合いである。②非認知能力は、既往研究において、非認知能力を測定する際に用いられる<sup>7)</sup>、Big-Five用いる。Heckman et al.<sup>8)</sup>によると、Big-Fiveは、「外向性」「協調性」「勤勉性」「神経症傾向」「開放性」の5側面で構成されているとしている。本調査では、小塩<sup>7)</sup>が作成した尺度を用い、「強く思う」から「全く違うと思う」の7件法で問い、数値の算出方法も既往研究<sup>7)</sup>に倣い調査を行った。③シビック

表1 WEBアンケート調査概要

調査期間	2024年2月16日~2024年2月19日
調査対象	3大都市圏を除く高校生
実施方法	調査会社(Freeasy)に調査を依頼し、アンケート調査を配信し、実施
回答数	633件

表2 調査項目

①属性
性別 / 居住都道府県 等
②非認知能力
小塩 <sup>7)</sup> が作成した非認知能力(外向性・協調性・勤勉性・神経症傾向・開放性)を測定するための5側面、10項目からなるBig-Fiveを用いる(7件法)。
③シビックプライド
伊藤 <sup>9)</sup> が作成した、地域愛着・忠誠的愛郷心・地域参画・地域アイデンティティの4側面、20項目で構成されるシビックプライドを用いる(5件法)。
④地域環境との接触度合い
既往研究で用いられている項目を参照し、地域愛着やシビックプライドの規定因として明らかになっている、公園(10)・自然(5)・地域の祭り(5)・公共交通機関(5)・近所づきあい(11)の5側面、11項目との接触度合いについて回答を求めた(5件法)。

クプライドは、伊藤<sup>9)</sup>が作成したシビックプライド尺度を用い、「あてはまる」から「あてはまらない」の5件法とした。④地域環境との接触度合いは、地域愛着やシビックプライドの規定因として明らかになっている、公園<sup>9)</sup>、自然<sup>9)</sup>、地域の祭り<sup>5)</sup>、公共交通機関<sup>5)</sup>、近所づきあい<sup>11)</sup>と定義し、既往研究を参考に尺度を作成し5側面、11項目との接触度合いについて回答を求め、シビックプライドと同様に5件法とした。

### 2-2. 非認知能力の単純集計結果

アンケート調査の結果を基に単純集計を行い、回答者の傾向と特徴を把握する。非認知能力の単純集計結果を表3に示した。なお、非認知能力の計算方法は既往研究に倣い行った。非認知能力の平均値が最も高かったのは、〈協調性(4.624)〉である。次に、〈神経症傾向(4.076)〉、〈開放性(4.076)〉と続いた。

## 3. シビックプライドと地域環境の構成要素

### 3-1. シビックプライドの構成要素

シビックプライド尺度の回答結果を基に因子分析(最尤法・プロマックス回転)を行い、シビックプライドの構成要素を明らかにする。20項目の相関行列の妥当性を確認するために、KMOの標本妥当性の測度の検討を行った結果、0.95となり、因子分析の適用は妥当だと判断した。分析の結果、「4.地元で自分の居場所はない」・「10. 地元を批判している人がいたら、地元を擁護する」の2つの項目は因子負荷量が0.35以下と低い値であったため削除し、再度、因子分析を行った。その結果を表4に示す。因子名を命名するために、高校生を対象にシビックプライド尺度の因子分析を行った既往研究<sup>5)</sup>と比較する。既往研究では、「12.地元のスポーツチームを積極的に応援する」の項目の因子負荷量が低く削除されているが、各因子が同様の項目で構成されている。そのため、既往研究<sup>5)</sup>に倣って、第1因子を「参画」、第2因子を「愛着」、第3因子を「アイデンティティ」、第4因子を「持続願望」と命名した。

表3 非認知能力の単純集計結果 (n=633)

非認知能力	項目	平均値
外向性	1. 活発、外向的だと思う。 6. ひかえめで、おとなしいと思う。	3.796
協調性	2. 他人に不満をもち、もめごとを起こしやすいと思う。 7. 人に気がつかう、やさしい人間だと思う。	4.624
勤勉性	3. しっかりしていて、自分に厳しいと思う。 8. だらしく、うっかりしていると思う。	3.374
神経症傾向	4. 心配性で、うるたえやすいと思う。 9. 冷静で、気分が安定していると思う。	4.572
開放性	5. 新しいことが好きで、変わった考えをもつと思う。 10. 発想力に欠けた、平凡な人間だと思う。	4.076
計算方法	外向性：項目1 + (8-項目6) 協調性：(8-項目2) + 項目7 勤勉性：項目3 + (8-項目8) 神経症傾向：項目4 + (8-項目9) 開放性：項目5 + (8-項目10) なお、平均値は各合計を2で割って算出した	

### 3-2. 地域環境の構成要素

地域環境の回答結果を基に因子分析(最尤法・プロマックス回転)を行い、地域環境の構成要素を明らかにする。20項目の相関行列の妥当性を確認するために、KMOの標本妥当性の測度の検討を行った結果、0.91となり、因子分析の適用は妥当だと判断した。分析の結果、「6.地元で、公共交通機関を利用することが多い」の項目は因

表4 シビックプライドの因子分析結果

項目	参画	愛着	アイデンティティ	持続願望
16. 自分は地域社会に変化を起こすことができると思う	<b>0.968</b>	0.022	-0.128	-0.073
15. 地域社会を良い場所にするための自分なりの貢献ができ	<b>0.922</b>	0.011	-0.079	-0.021
14. 自分のような人間が地域社会で重要な役割を果たすと思う	<b>0.914</b>	0.015	-0.089	0.018
13. 地域社会の一員としての責任を真剣に考えている	<b>0.695</b>	0.046	0.062	0.069
11. 家族や友人に地元の産品や製品を使うよう勧める	<b>0.532</b>	-0.058	0.145	0.130
12. 地元のスポーツチームを積極的に応援する	<b>0.447</b>	-0.010	0.237	0.057
2. 地元が好きだ	-0.009	<b>0.906</b>	-0.079	0.074
3. 地元の雰囲気や土地柄が気に入っている	0.028	<b>0.810</b>	-0.025	0.038
1. 地元は住みやすいと思う	-0.086	<b>0.758</b>	0.018	-0.076
5. 地元でずっと住み続けたい	0.253	<b>0.603</b>	0.071	-0.165
6. 地元は大切だと思う	-0.104	<b>0.508</b>	0.091	0.283
9. 地元は、他のほとんどの地域より良い場所である	0.221	<b>0.415</b>	0.077	0.168
19. 地元の市民であることは自分にとって重要なことである	0.250	0.061	<b>0.636</b>	-0.039
17. 人生の大部分が地元で結びついている	0.246	-0.015	<b>0.559</b>	-0.088
20. 地元は自分にとって特別な場所である	-0.113	0.287	<b>0.557</b>	0.095
18. 「地元の人」という言葉は、自分がどういう人物かをよく説明する言葉である	0.467	-0.144	<b>0.502</b>	-0.009
7. 地元について何でも変わって欲しくないものがある	0.017	0.088	-0.084	<b>0.870</b>
8. 地元になくなってしまうと悲しいものがある	0.044	0.060	-0.006	<b>0.768</b>

表5 地域資源の因子分析結果

項目	近所づきあい	自然	公園祭り
9. 地元で、よくおすそ分けをし合う人が多い	<b>1.010</b>	0.059	-0.233
10. 地元で、家族ぐるみのつきあいをしている人が多い	<b>0.822</b>	0.062	-0.049
8. 地元で、互いの家によく訪問し合う人が多い	<b>0.769</b>	-0.012	0.074
7. 地元で、庭先や道ばたで会うと良く立ち話をする人が多い	<b>0.615</b>	-0.067	0.194
11. 地元で、よく一緒に外出するような関係の人が多い	<b>0.491</b>	0.03	0.242
3. 地元で、鳥や虫の鳴き声を聞くことが多い	-0.017	<b>0.891</b>	-0.055
2. 地元で、自然を感じる人が多い	0.041	<b>0.756</b>	0.053
1. 地元で、公園を利用することが多い	-0.074	-0.012	<b>0.715</b>
4. 地元で、地域の祭りに参加することが多い(祭りの担い手ではない)	0.04	0.246	<b>0.500</b>
5. 地元で、地域の祭りに担い手として参加することが多い	0.344	-0.169	<b>0.483</b>

子負荷量が0.35以下と低い値であったため削除し、再度、因子分析を行った。その結果を表5に示す。因子1は、すべて近所づきあいの項目で構成されているため、〔近所づきあい〕因子と命名した。因子2は、地元で鳥や虫の鳴き声を聞くことが多いや、自然を感じるが多いと、自然に関する項目で構成されているため、〔自然〕因子と命名した。因子3は、公園の利用が多いや地元の祭りへの参加に関する項目で構成されているため、〔公園祭り〕因子と命名した。

#### 4. 非認知能力の地域環境とシビックプライドへの影響

##### 4-1. 分析の概要

非認知能力が地域環境とシビックプライドに与える影響を明らかにするために、共分散構造分析を行う。既往研究では、公園、祭り、自然といった地域環境がシビックプライドに影響を与えていることを示している。また、米原ら<sup>9)</sup>は、非認知能力と地域愛着との関係性を示している。つまり、非認知能力とシビックプライド、地域環境とシビックプライドの関係性は明らかになっている。これらより、本研究では、非認知能力がどのような地域環境との接触を促し、それがシビックプライドを高めるのか、という仮説モデルを設定し、共分散構造分析を行う。なお、非認知能力と地域環境の関係性を示す既往研究は見られないが、本研究では、共分散構造分析の適合度やパスの有意性から、これらに関係があるとみなし、分析を行った。なお、シビックプライド間関係は既往研究<sup>5)</sup>に倣い、愛着から他のシビックプライドの構成要素へとパスを引いて行った。

##### 4-2. 非認知能力の地域環境とシビックプライドへの影響

仮説モデルを基に、パス係数が5%水準で有意となるよう探索的に推定を行い、図1のモデルを得た。図中にある数字は標準化されたパス係数で、因果関係の強さを意味し、誤差変数は省略した。また、パスの太さは有意

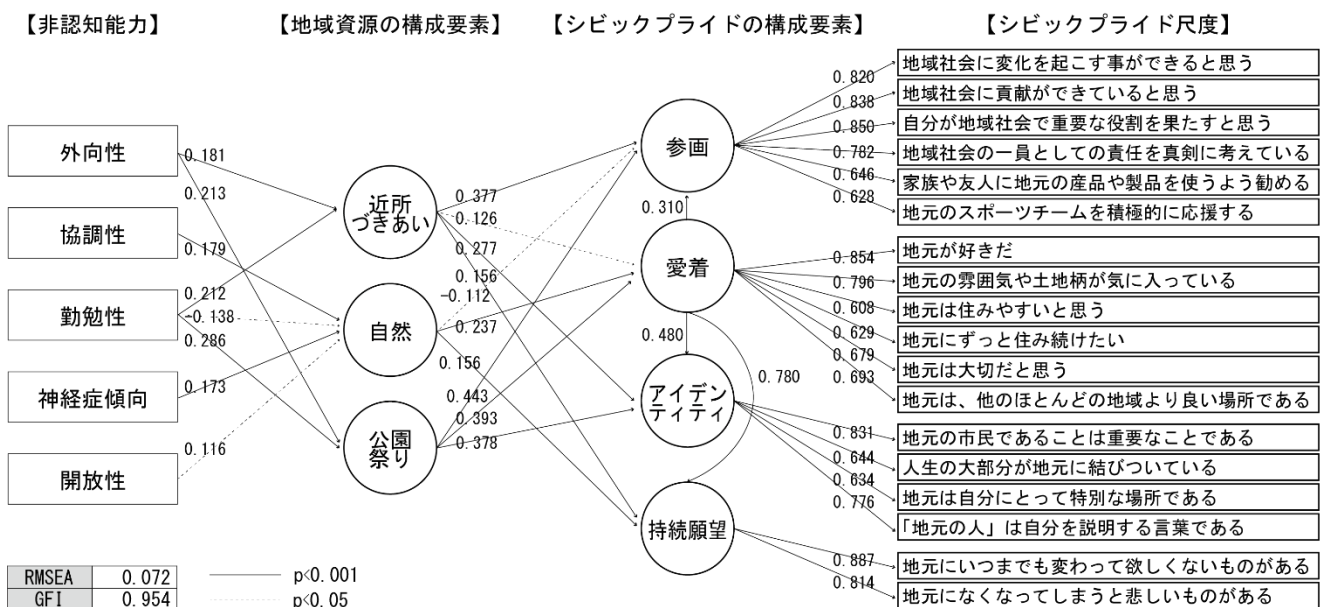
水準を示す。モデルの適合度を表す指標は、RMSEA=0.072、GFI=0.954であり、適合度は、一般的にRMSEAは0.05以下、GFIが0.9以上であれば適合すると判断される<sup>12)</sup>とされており、本研究で得られたモデルは基準の適合度を上回っていることから3者の関係性を示していると判断した。また、四角で囲われているのが観測変数、円で囲われているのが潜在変数を表す。左段に並ぶのが非認知能力、中央左段に並ぶのが地域環境の構成要素、中央右段に並ぶのがシビックプライドの構成要素、右段に並ぶのがシビックプライド尺度である。

以下、本項では括弧内は標準化されたパス係数を示す。各非認知能力と地域環境間で最も強い関係が見られたものに着目する。なお、標準化されたパス係数が0.200以上のものを強い影響が見られたとした。〈外向性〉は〔公園祭り〕(0.213)に強い影響が見られた。〈勤勉性〉は〔公園祭り〕(0.286)と〔近所づきあい〕(0.212)に強い影響が見られた。標準化されたパス係数に着目すると、〈勤勉性〉から〔公園祭り〕に最も強い関係が見られた。なお、非認知能力の〈協調性〉と〈神経症傾向〉、〈開放性〉と地域環境間には強い関係は見られなかった。

地域環境の各構成要素とシビックプライドの構成要素間で強い関係が見られた標準化されたパス係数が0.200以上ものに着目する。なお、標準化されたパス係数が0.200以上のものを強い影響が見られたとした。〔近所づきあい〕は「参画」(0.377)と「アイデンティティ」(0.277)に、〔自然〕は「愛着」(0.237)に強い影響を与えている。〔公園祭り〕は、「参画」(0.443)や「愛着」(0.393)や「アイデンティティ」(0.278)に強い影響を与えている。標準化されたパス係数に着目すると、〔公園祭り〕から「参画」に最も強い関係が見られた。

#### 5. 総合考察

これまでの分析結果を総合的に考察する。既往研究<sup>5)</sup>



より、シビックプライドの醸成に地域の愛着が基盤になっているということから、「愛着」に影響を与える地域資源の構成要素と非認知能力に着目する。「愛着」には、地域資源の〔公園祭り〕と〔自然〕が強い影響を与えていることが明らかになった。既往研究において、公園の存在が地域愛着を向上することを指摘しており、本研究でも同様の結果を得ることができた。

また、〔公園祭り〕は〈勤勉性〉や〈外向性〉によって高まることが明らかになった。勤勉性が高い人は、計画的で責任感が強く、仕事や目標に対して一生懸命働くとされている。吉野ら<sup>13)</sup>は、勤勉性と外向性が高い人ほど健康であることの指標として用いられる BMI が下がり健康的であることを指摘した。これらより、勤勉性と外向性が高い人は、定期的な運動やリフレッシュの機会として、公園での活動を計画的に取り入れており、その結果、身体的に健康であること可能性がある。また、勤勉性が高いことでコミュニティの一員としての責任を感じやすく、地域の祭りへ積極的に参加する高校生が多いことが考えられる。

外向性は主観的経験の内面世界よりも、人や物の外界に興味やエネルギーを向ける力だとされており、会話スキルともいわれている<sup>14)</sup>。また、引地ら<sup>15)</sup>は、祭りは住民間の密なコミュニケーションを必要とすることから、地域愛着の向上につながると指摘している。このことから、外向性が関係すると考えられる地域の祭りに参加する高校生は、地域への愛着も高まることが示唆された。

## 5. まとめ

本研究は、非認知能力が高校生の地域環境との接触度合いおよびシビックプライドに与える影響を明らかにすることを目的とし研究を行った。具体的には、外向性、勤勉性などの非認知能力が、公園や地域の祭りへの参加、近所づきあいといった地域環境との接触度合いをどのように促進し、それがシビックプライドにどう影響するかを明らかにした。

分析結果から、特に勤勉性と外向性が高い高校生は、公園や地域の祭りへの参加が活発であることを明らかにした。これは、勤勉性が高い人が計画性や自己規律を持ち、コミュニティへの貢献や参加を重視する傾向にあるためと考えられる。また、外向性が高い高校生は、地域の祭りに参加することで地域への愛着を高めることが示唆された。

本研究は高校生のみに対する研究であるため、成人においても非認知能力と地域環境、シビックプライド間の関係に同様の結果が見られるかは定かではないため、広い年齢層において調査研究を行う必要がある。本研究では、育成可能である非認知能力に着目し、シビックプライドとの関係を明らかにした。しかし、本研究は全国的な調査であったため、地域ごとの文化的、経済的な違いが非認知能力の発達や地域環境との関わり方にどのよう

な影響を与えるかを明らかにすることが出来なかったため、今後の展望としたい。

## <参考文献>

- 1)小塩真司。(2023),「非認知能力」の諸問題—測定・予測・介入の観点から—,教育心理学年報,62,pp.165-183
- 加藤 智 (2019),非認知的スキルを高めるための教育的介入の効果に関する一考察,『愛知淑徳大学論叢文学部編』,44,pp.57-58.
- 加藤 智 (2019),非認知的スキルを高めるための教育的介入の効果に関する一考察,『愛知淑徳大学論叢文学部編』,44,pp.57-58.

## 【参考文献】

- 1) 小塩真司。(2023),「非認知能力」の諸問題—測定・予測・介入の観点から—,教育心理学年報,62,pp.165-183
- 2) 君野里絵 (2022),高等学校における非認知能力育成のための効率性,長崎大学. 入手先:長崎大学学術研究成果リポジトリ <https://nagasaki-u.repo.nii.ac.jp/records/27313> (最終閲覧 2024.3.12)
- 3) OECD, ベネッセ教育総合研究所訳 (2015), 家庭、学校、地域社会における社会情動的スキルの育成 国際的エビデンスのまとめと日本の教育実践・研究に対する示唆
- 4) 伊藤香織, 紫牟田伸子 (監修), シビックプライド研究会 (編集) (2015), シビックプライド2 [国内編]: 都市と市民の関わりをデザインする, 宣伝会議
- 5) 森豪大, 藪谷祐介, 宋俊煥(2022), 高校生のシビックプライドの醸成要因と将来の定住意識に与える影響 富山県高岡市に居住する高校生を対象として, 都市計画論文集, 57(3), pp.933-940
- 6) 米原拓矢, 田中大介(2015), 地元志向と心理的特性との関連: 新たな発達モデルの構築に向けて. 地域学論集: 鳥取大学地域学部紀要, 11(3), pp.139-157
- 7) 小塩真司, 阿部晋吾, カトロニー・ピノ (2012), 日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み, パーソナリティ研究, 21, pp.40-52
- 8) Heckman, J. J., & Kautz, T. (2013). Fostering and measuring skills: Interventions that improve character and cognition.
- 9) 伊藤香織 (2017), 都市環境はいかにシビックプライドを高めるか 今治市を事例とした実証分析, 都市計画論文集, Vol.52, No.3, pp.1268-1275
- 10) 藪谷祐介, 阿久井康平 (2021), 高校生の通学時における地域接触が地域愛着形成に与える影響 富山県小矢部市内の高校に通学する高校生を対象として, 都市計画論文集, Vol.56, No.3, pp.772-779
- 11) 青柳涼子 (2017), 地域愛着および地域とのつながりを規定する要因の探索的分析, 淑徳大学大学院総合福祉研究科研究紀要, 24, pp.25-42
- 12) 尾崎幸鎌, 荘島宏二郎 (2014), パーソナリティ心理学のための統計学: 構造方程式モデリング, 誠信書房
- 13) 吉野伸哉, 小塩真司 (2020), 日本における Big Five パーソナリティ特性と BMI の関連, 心理学研究, 91(4), pp.267-273
- 14) 小塩真司 (2023), 「非認知能力」の諸問題—測定・予測・介入の観点から—, 教育心理学年報, 62, pp.165-183
- 15) 引地博之, 青木俊明, 大淵憲一(2009), 地域に対する愛着の形成機構 -物理的環境と社会的環境の影響-, 土木学会論文集 D, Vol.65, No.2, pp.101-110

\*富山大学人文社会芸術総合研究科 大学院生

\*\*ポモナカレッジ情報工学・認知科学専攻 大学生

\*\*\*富山大学学術研究部文化学系 講師・博士 (デザイン学)

\*Grad. Student, Grad. School of Art and Design, Univ. of Toyama

\*\*Student, Computer Sci./Cognitive Sci. Double Major, Pomona Col.

\*\*\*Lecturer, Faculty of Art and Design, Univ. of Toyama, Dr. of